

エッセイ

— 私の文学館散歩 (四) —

田園と都会、そして熊野の洋館

松村 茂治

「田園」はどこだ？

長いこと私は、「田園の憂鬱」の舞台は東京の練馬か埼玉の所沢の辺りだろうと思っていた。その誤りに気づいたのは、数年前にこの「散歩シリーズ」を計画した際、いずれ佐藤春夫を取り上げたいと思って開いた文学全集の年表に、大正五年、「愛犬二頭、愛猫二匹と共に神奈川県都筑郡中里村（横浜市港北区市ヶ尾町の朝光寺に、後に鉄（くろがね）町）に転居す」とあり、その翌年に、「『田園の憂鬱』の稿を起こす」とあるのを見てのことである。

全くの方向違いにも拘わらず、ずっと練馬・所沢を修正できないでいたのは、作品をきちんと読んでいなかったか

らに他ならないが、そもそもどういいう経緯でそうした思い込みが生じたのか、全く心当たりはない。「田園」と聞いて、勝手に自分が馴染んできた田園を連想したのかもしれないが、この件については出版社側にも全く責任がないとは言えないのである。

たとえば、新潮文庫のカバーには、「・・・己の生の意味を見失った青年が、愛人と二匹の犬と一匹の猫をかかえて草深い武蔵野の一隅に移る」（年表では猫は二匹だが、作品では一匹が愛人に化けているようだ）とあり、本文にも「広い武蔵野が既にその南端になって尽きるところ・・・その道に沿うて一つの草深い農村が・・・」とある。

おそらく、こうした記述から、舞台は武蔵野、武蔵野なら東京西部と決めつけてしまったものと思われる。言い訳をもう少し続けさせてもらえば、武蔵野と言えば、国木田

独歩であり、かの名著の冒頭に、「武蔵野の俵は今わずかに人間郡に残れり」とあるので、私の「所沢」という連想は、武蔵野としては極めて正しい認識なのである。

どの範囲を武蔵野というのかについては、独歩とその朋友が明確な定義を行っている。彼らによれば、武蔵野は「東京市の町外れ」であり、もう少し限定的に言えば、「・・・武蔵野はまず雑司ヶ谷から起こって線を引いて見ると・・・川越近傍まで達し・・・入間郡を包んで丸く甲武線（現在の中央線）の立川駅に来る。・・・さて立川からは多摩川を限界として上丸辺まで下る。八王子は決して武蔵野には入れられない・・・」ということである。現在の鉄道で言えば、東武東上線、西部池袋線、西部新宿線、中央線、そして京王線の沿線が、ほぼ武蔵野をカバーしていることになる。

改めて指摘するまでもないが、「多摩川を限界と」するのがポイントなのである。その南に位置する多摩丘陵を超えれば、そこは武蔵の国ではなく相模の国ということになる。武蔵の国の中心である府中（！）に育った私としては、

多摩丘陵を越えた先の、横浜の一面に位置する辺りを武蔵野とすることには、たとえ大文豪の筆とはいえ承服しがたいのである。

文豪自身、「武蔵野が既にその南端になって尽きるところ・・・」とされているので、何歩か譲って、ここは武蔵野ではないという宣言と読み取れなくもないが、この地を特徴づけるにあたって、敢えて「武蔵野」を持ち出すということ自体、私には解せないのである。それにも拘わらず、新潮文庫の解説を担当した壇一雄が、その舞台について堂々と、「武蔵野の一隅に・・・」と記しているのはいかげなものか。壇は文学者であり地理学者ではないと言えはそうかもしれないが、「都会の憂鬱」の解説にあたった評論家の山本健吉が、「『田園』は・・・相模野のある農村に住んだときの・・・」と、極めて的確な認識を示しているのはさすがである。

ああ、私の思い込みから、散歩に出かける前から、ずいぶん道草を食ってしまった。行き先は、彼らをはじめに住んだ中里村朝光寺であり、そこから転居した鉄町である。くだいようだが、そこが武蔵野ではないことが幸いして、今の私にとっては極めて行きやすい所となっているのである。

作品には、「それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にし」た辺りであるという。鉄町ということが分かっているのであえてややこしいことをするまでもないが、そこを起点に六、七里にある都会を探せば、Yは横浜、Hは八王子、Tは東京（渋谷あたりか？）ということになるのだろう。彼らの住居の南には丘陵が望め、その先にはHに通じる鉄道が通っていて、そこを通る列車の音が聞こえて来るという。列車というのは現在の横浜線だろう。横浜線は、八王子から輸出入の生糸を運ぶ鉄道として、明治の終わりに開業しているの、時代的には矛盾しないが、地図で確かめてみると、鉄町から横浜線までは直線距離にして四、五kmはあり、しかも丘陵を超えた先なので、本当に列車の通過音が聞こえてきたのか疑問を感じなくはない時に、不眠症の主人公を悩ますほどの列車の音だったということだが、彼の猫・・・ではない、妻は聞こえていないということだから、彼の過敏な反応だったのかもしれない。

「田園」散歩

横浜線橋本駅で飛び乗ったのが快速電車だったので、乗り換えの長津田駅には十五分ほどで着いた。田園都市線の改札を抜けて上りホームに下りていくと、各駅停車が待つ

ていて、すぐに発車となった。市ヶ尾駅までは四駅、十分とはかからない距離である。

二年半ほど前に発行された「佐藤春夫読本（以降「読本」と略記）」に、この作品の舞台が写真と新旧の地図入りで紹介されていて、散歩者にとつては何ともありがたい。市ヶ尾駅で電車を降り、その地図を頼りに大通り（県道12号線）まで出ると、夫妻が最初に住んだ朝光寺は、目と鼻の先にあつた。急な石段を登っていくと山門があり、広くはないが手入れの行き届いた庭に白梅が咲いていた。寺は高台にあるので眺望は良く、南側に広がっているのは、作品でフェアリー・ランドと命名された丘陵地帯であろう。間借りしていたという本堂は、近年建て替えられ、当時のぶものは見当たらないが、庭の隅に置かれた、寺の由来が書かれた石碑に、面白い一文を見つけた。この寺は相模国の末寺として武蔵国市が尾村に建立されたというのである。当時の行政区画がどうなっていたのか知らないが、現在横浜市に編入されているこの地が、武蔵国だったというのは初耳で、春夫自身ここを「武蔵野」の地名を使って表現しようとしていた理由が、こんな所にあつたのかという思いであつた。しかしながら、もう一度くどいようだが、武蔵国と武蔵野とは一部重複はするが、別の概念であるこ

とを改めて指摘しておきたい。

作品の舞台となった旧宅跡は、朝光寺の西方に位置する。そこへは、県道12号線を使っても行けるが、読本の旧地図に示されている日野往還（旧宅はこの街道沿いにあり、作品の冒頭で主人公たちが歩いていたのはこの道であろう）が、横浜上麻生道路としてほぼそのままの位置に残っているようなので、こちらを行くことにする。

新しく作られた県道が、元々の土地の状況を見捨て、一直線に走っているのに対して、日野往還は田舎道らしく見事に湾曲している。それは、周囲の等高線に合わせた曲線であるうし、それはまた、すぐ南側を流れる鶴見川の川筋を反映した曲線でもあるだろう。途中、旧竹ノ下の交差点（ここで日野往還と交差しているのは、旧大山街道と思われる）の手前には、当時、旅館として使われていた建物が残っており、そのガレージには、「読本」の写真と同じ白い車が停まっていた。春夫が生活費捻出の手段として購入したという土地は、この交差点近くにあつたはずである。往還に沿って、ほとんど暗渠になってはいるが、細い流れがあり、作品で「道に沿うて一条の小渠があつた」と記されていたのは、この流れのことだろう。「遠い山間から来た川上の水を真直ぐに引いたものだけに、その美しさは

溪と言いたいような気がする。」とある。飼犬たちは、この水を美味しそうに飲んだのである。

鉄町は、朝光寺からおよそ二キロの所にある。「中里学園入り口」と表示された交差点の道路脇に、見落としてしまふような石碑が置かれ、「田園の憂鬱 由縁の地」と記されていた。春夫の甥竹田龍児の書ということだが、龍児は、春夫の姉の子であり、谷崎潤一郎と千代（後に、春夫の妻となった）との間に生まれた鮎子の夫となった人物である。

この地に立つてみて、どうして春夫が、わずかな間とはいえ、ここに住むことにしたのか不思議に思う。市ヶ尾に来る前には、現在の新宿区あたりに居たはずである。できるだけ辺鄙な所を探していたのなら、納得したいとは思いますが、それがどうしてこの地だったのだろう。特別なツテがあつたのだろうか。それにしても大正五年のことである、鉄道を使うとすれば東海道線・横浜線経由ということになり、かなりの遠回りを強いられることになる。しかも、横浜線の最寄り駅からは四、五キロはあり、そこは馬車を使うことになるのではなからうか。そうまでしてやってきたこの地に、今や石碑が一つ。周囲には家も増え、車の行き交う広い道路も通るようになったが、この石碑に気

づき、立ち止まる人が何人いるのだろうか。

この石碑の前に立って南を見渡すと、フェアリー・ランドと名付けられた小高い丘陵一帯を見渡すことができる。そこに至る道は、途中までは、昔と同じ道をたどっているように思われる。途中まで、というのは、今では丘陵全体が住宅地として開発され、新たな道が縦横に走っているが、「読本」にある古い地図を見ると、かつてここは山の中であり、後で取り上げる「西班牙犬の家」で、愛犬フラテを連れた作家が散歩をする雑木林はこの辺りだったのだろうかと思像するからである。

その散歩道の見当をつけることも、目的の一つではあったが、それよりも、ここから丘陵を遠望した作家が、「その丘はどこか女の脇腹の感じに似て居た。のんびりとした感情を持ってうねってゐる優雅な、思ひ思ひの方向へ走ってゐる無数の曲線が、せり上がって、せり持ちになって出来上がった一つの立体形であった。」と表しているのが気になって仕方がない。そんなふうには描写されても、住宅が密集し、所々に学校だろうか、鉄筋コンクリートの大きな建物まである丘陵のどこが脇腹なのか、容易には想像できない。ゆつたりとした曲線がわずかに感じられる木々の連なりがそれらしく見えたので、そこを目指して行くことに

した。そこが公園ならば、フラテや作家が散歩した光景が残っているかもしれないし、街路樹ならば、そのまま私を田園都市線の駅に導いてくれるだろうと考えたのである。

遠くから見たときには、ゆつたりとした丘陵に見えたが、坂道を登り始めてみると、存外に急傾斜であることが分かる。横たわっていたのは、かなりグラマラスな女性だったということである。宅地化にあたっては、かなり整地をしたはずだから、かつては結構な山登りだったのだろう。途中の公園で一休みしたが、作家や作品に結びつくようなものはありそうになかった。他にも公園は二、三あるようなので、彼らの痕跡を見つけるには、改めて出直すことになるのかもしれない。

肝心の作品についてだが、特段の事件が起きるわけでもなく、したがってカタストロフィもなければ大団円もなく、それでいて淡々とした平凡な日常の連続かというところいう訳でもなく、むしろ屈折した日々が過ぎてゆくという体裁になっていて、読み手としては多大な努力を強いられたというのが、私の受け止め方である。

しかしながら、同時代の作家（廣津和郎）は、「……『田園の憂鬱』は、私に近年にない感動を与えた。少なく

とも、今年になって私が読んだ各作家の中では、此位私の胸を打つたものは他にない。」という感想をもらし、評論家（小林秀雄）は「『田園の憂鬱』『都会の憂鬱』は、佐藤氏の初期の代表作と言われているが、今度読み返してみても、初期の代表作にとどまらず、この姉妹編は氏の全作中の逸品たるを失わぬと思った。ともに見事な青春の書である。」との評価を与えている。

廣津は明治二十四年生まれ、この評論を書いたのは大正七年だから、二十七、八歳、小林は明治三十五年生まれで、文章が書かれたのは昭和九年だから、三十一、二歳のことである。二人は文学者、こちらは素人なので、資質の違いは当然のことだが、時代背景も今とはずいぶんと違っていたのだらうと思う。あるいは、小林の言うように「青春の書」ということなら、この私でも、青春時代に読めばもう少し共感できたのではないかと淡い期待を持つのだが、過ぎ去った時間を取り戻すことはできない。

同じような、青春の呻吟の日々を描いた「都会の憂鬱」は、江森渚山なる人物を登場させ、作品にストーリー性を持たせているので、「田園」よりは読みやすかったが、いずれも、「彼は……」「彼の目の前に……」といった具合に、ストーリーが三人称で展開されているところが気

になって仕方なかった。こちらが勝手に書き手の心情そのまま書き綴っているのだらうと思っただけで読もうとしていたからだろうが、一人称表記にすればもう少し読みやすかったのではないかと思えてならない。次に扱う「西班牙犬の家」では、「犬が私を……」と、一人称表記になっているので、すんなりと作品の中に入れるような気がするのである。こんな風を感じるのは、私だけだろうか。

「西班牙犬の家」

同じ作家が、ほぼ同じ時期に、「西班牙犬の家」を書いたということが不思議である。この作品は、手元にある六冊の春夫アンソロジーのうち、新旧の岩波文庫、ちくま文庫、新学社文庫の四冊に収められており、しかもそのうちの二冊は自選集であることから、自他共に認める代表作ということになるのだらう。もちろん、現代日本文学体系にも収められている。

この作品は、大正六年（一九一七年）、春夫二十五歳の作で、デビュー作にして作家としての地歩を固めた作品ということである。個人的には、こういう作品が好きである。「田園の憂鬱」は、読んでいる方まで憂鬱な気分になって

くるような作品だが（そういう意味では成功作ということになるのだろうが）、こちらは、副題にあるとおり、読者を夢見心地にしてくれる。小説的な構成はほとんど無く、いや実際には周到に考え抜かれた上でのことかもしれないが、虚構であるということを感じさせない書き出しである。

フラテ（犬の名）は急に駆けだして、蹄鍛冶屋の横に折れる岐路のところ、私を待っている。

いつものように、犬に誘われるようにして散歩に出かけるのだが、この日は、犬に主導権を持たせ、それまで踏み込んだことのない道を進むことにしたようである。街角を曲がり山道を辿り林を抜け、読者も作家とともに歩みを進めるが、まさかそれが小説の世界に導かれているとは気づかない。

辿っているのは春夫によりフェアリー・ランドと名付けられた丘陵地帯であろう。場所を特定できる記述はどこにもないが、一個所だけ自分たちの住まいを「K村」と称する所があり、これは「鉄村」のことだろうと想像するのである。春夫は、本作刊行の前年（大正五年 一九一六年）、はじめ朝光寺に仮住まいをし、二か月ほどで鉄村に転居し

たということである。

愛犬が蹄鍛冶屋の角で主人公を待っている、という書き出しから、当初、それは春夫が土地を購入したという旧竹ノ下（現在の上市が尾）の交差点の辺りかと思っていたのである。なぜなら、「読本」には、大山街道には、何軒もの鍛冶屋があったと書かれているからである。しかしながら、丘陵へ散歩に出かけるにしているからである。しかしながら、自然な方向になるということが、今回歩いてみて分かった。馬車が重要な交通手段だった当時、蹄鍛冶屋は、大山街道だけでなく、あちこちにあったということなのだろう。

ともかく、作家と愛犬は、丘陵地帯に分け入って行く。かなり長時間の散歩だったようで、作品には、二時間ほど歩いてかなりの高みへ来たところである。はじめのうちこそ、農道のようなものであったにせよ、道はあったが、いつの間にか道なき道を、草を踏み分け歩むようになる。そして、犬に導かれるまま進んだ雑木林の奥深くに、一軒の不思議な家を見つけたのである。その家の窓から中を覗くと、今し方まで、人がいたような気配はするが、一匹の犬（西班牙犬）がいるだけで、人の姿は見えない。

これから読む人もいるだろうから、作品の結末については、はっきりしたことはここで書かない。敢えて言うならば、みた彼のデッサンや版画の方はその百貨店へ急ぎの用のある家内とともに出かけて鑑賞したが、油彩の方は会場が別であつたから行けなかつた。

わたくしは老体のうへ若いころから人ごみが嫌ひなため、群衆のなかへひとり出かけることが不安なので家内を誘ふが彼女は行きたくないといふが、せがれが一緒に行きたいといふので、そのつもりでいたら、せがれは動物心理の勉強中で、鳩の色彩鑑別能力とかいふ実験をはじめて寸暇がないが、そのうちに暇をこしらへると言つただけで、終に連絡がなく、空しく日が経つてみた

（近代浪漫派文庫27 佐藤春夫 新学社）

少し調べてみて、以下のことが分かった。

まず、話題になっているシャガール展であるが、開催期間は、一九六三年（昭和三八年）十月一日から同年十一月十二日、会場は国立西洋美術館と白木屋とある。春夫が出かけた百貨店は白木屋だった。国立美術館に誘つても「行きたくない」と言っている奥方は、谷崎潤一郎から譲り受けたという千代夫人であろう。

「わたくしは老体」とあるが、このとき春夫は七十一歳、この展覧会をモチーフに「小説 シャガール展を見る」を

ここまで来てはじめて、ああ、これは小説だったのだと気づく仕掛けになっているのである。今のご時世なら、コンピュータグラフィックスとやらを使って、これでもか！といった映像に仕上げるのだろうが、そうした表現に接する前に、文章で鑑賞できたことは幸せなことであつた。

「小説 シャガール展を見る」

この小説には、私が言葉を交わしたところのある人物が登場するということがあつて、親しみもてる作品である。手元にある文庫本一冊でしか取り上げられていないので、名作というのではないかもしれないが、こんな風に人をだませたら楽しいだろうとも思うのである。

この作品も、「西班牙犬の家」と同様、シャガール展に出かけようとする自らの行動をありのままに書いているようで、「小説」という但し書きがなければ、エッセイとして読んでしまうところである。実際、半分くらいまではエッセイそのものと言える。しかも、書き出してすぐの所で、かつて私が言葉を交わしたところのある人物が登場してくる。

旅行から帰ってみると、用事が立てこんでいて展覧会場に出かける日がない。たださる百貨店で催されて

発表したのは翌年の一月、そしてその年の五月六日には、自宅の応接間でラジオ番組の収録をしている最中に心筋梗塞を発症し急逝してしまった。

さて、先の引用のなかで気になるのは、シャガールではなく「せがれ」について記述である。彼こそ、千代夫人との間に生まれた長男、方哉（まさや）氏で、後に、慶應義塾大学の教授となるのだが、この当時は、大学院の博士課程を満期退学して間もない頃で、慶應義塾大学の助手をされていたはずである。文中の「動物心理の勉強」というのは、専門的には実験的行動分析学の研究を行っていたということである。この分野では、伝統的にハトを使って実験をすることが多く、方哉先生も、行動分析学の創始者スキナーに倣い、ハトを用いた弁別学習の実験に従事していたのである。さらに調べてみると、先生は、一九六〇年頃から、伝書鳩を用いた色光の弁別学習に関する論文を何編か発表しており、おそらく学生への指導を含め、このテーマの研究に余念がなかったものと思われる。まさに、新進気鋭の研究者ということであり、たとえ我が国を代表する文豪の頼みとはいえ、そう簡単に職場を離れるわけにはいかなかったのだ。

私が方哉先生と言葉を交わした件については、以前にもいだのは、「小林会員」とあるので、これは小林秀雄だろう。小林の年譜を見ると、この年八月から、ソヴィエト・ヨーロッパを旅行し、十月に帰国したということなので、向こうでもう少しゆっくりしてくれば、不正の片棒を担がされることはなかったということになる。

手元の現代日本文学大系の附録には、奇しくもこの二人の論文、「『田園の憂鬱』の作者」（廣津和郎）と「佐藤春夫論」（小林秀雄）が収録されている。純粹に、春夫の良き理解者であった故での人選だったと思うが、シャガール展の一件が尾を引いていたかもしれないと思って読むと、それはまた楽しい事である。

作品の結末については、これも、これから読む人もいらつしやるだろうから、詳細は省く。言ってみれば、シャガールの絵を、文字にするとこんな感じになるのだろうか、というのが私の理解するところである。

私の「小説・シャガール展を見る」

東京でシャガール展が開かれているのを教えてくれたのは、佐藤春夫だったと言っても過言ではない。「小説 シャガール展を見る」を読んだ直後に、たまたま新宿に行く用事があり、京王線とJRを結ぶコンコースの壁にシャガール

記したが（本誌第二十八巻「谷崎潤一郎記念館と倚松庵」）、かいつまんで言うと、今から四十年近く前、早稲田大学で行われていた学習理論についての勉強会に出席していた折り、ある日ひょっこり方哉先生が顔を見せたことがあり（先生のお弟子さんで、後に夫人となられた方《當時は大学院生》が、勉強会に出席されていた）、一つ二つ、質問をさせて頂いたのである。

方哉先生は、我が国行動分析学研究の第一人者であり、私が手元に置いて勉強した「行動理論への招待」の中では、ご自身のことを「行動分析学 二段」と謙遜して（？）お書きになっていらつしやつたが、私のような駆け出しの者にとっては、恐れ多くて近づき難い人で、序の口、序二段の力士にとっての大関・横綱というのは、このような存在ではないかと思つた次第である。

結局、方哉先生は都合がつかず、展覧会最終日になって、春夫はかなり強引な手を使って出かけることになった。そのやり方の具体については、作品を読んで頂くことにするが、強引と言うより不正手段と言つた方が適切なような気がする。その手を考案したのは「広津（芸術院）会員」とあるから、廣津和郎であろう。そして、その手の片棒を担

ル展のポスターがあるのに気づいたのである。小説を読んだ後だからこそ気づいたのであり、そうでなければ素通りしてしまつていたのであろう。

若い頃には、童話の一場面を描いたような画風に親しみを感じて画集を買つたり、付録についていた複製を部屋に貼つたりしていたが、それらはいつの間にかどこかへ行ってしまった。

数年前パリに行ったとき、久しぶりにシャガールに再会したのであった。真夏ということもありオペラ座には特段の催し物の予定はなく、内部を自由に見学することができた。何の予備知識もなく行つたので（何度か建物の前は通つたものの、そこがオペラ座とは気づかなかつたほどの無知・無関心であった）、いつ頃誰が建てたのか、何に使われるのか、何もわからなかつたのだが、見学のボックス席から見上げた天井の鮮やかな色彩に言葉を失つた。シャガールの大天井画だったのである。

帰つて来てから知つたことだが、この天井画は、一九六三年に時の文部大臣アンドレ・マルローの依頼によつて着手され、その翌年に完成したとのことだった。一九六三年と言えば、日本でシャガール展が開かれた年であり、春夫はその観覧の経緯を「小説 シャガール展を見る」として

作品化したのである。

東京駅の丸の内北口ドームの改札を出たすぐ右手が、新装なったステーションミュージアムの入り口である。もしやと思ひ、ドームの天井を見上げてみたが、当然のことと言つたらいいのか、そこに天井画はなかった。せめて、春夫が気に入つたという「休憩」や奇妙な女の子と知り合うきっかけとなつた真紅な雄鶏や炎の竜馬の絵（いずれも正確な画題は不明）に出合うことを楽しみに、三階の展示場に急いだのである。

結論から言えば、探していた絵には巡り会えなかった。・・・と思う。「休憩」は、今回の展示リストに含まれていなかったし、「真紅な雄鶏」については、それらしい絵はあつたものの制作年代が合っていなかった。また、赤い動物が空を駆けている絵もあつたが、私が見たのは、たてがみをなびかせる天馬ではなく、角が生えているところからそれはどう見ても赤い牛だった。

今回のシャガール展に、「三次元の世界」と題され、陶器の作品や大理石に彫られた作品も多数出展されていた。全くの素人の感想だが、陶器というと、私は酒器や食器をイメージしてしまうからか、造形作品にはあまり関心が持てなかった。

つくと、右隣の席に、さつきまで前を歩いていた外国人二人連れが腰をおろすところだった。

飲み物を注文し、入館時にもらつた作品リストを広げて展示場の作品を思い出したり、メモをしたりしていると、隣の席からフランス語の声が聞こえてきたのである。私に直接話かけているわけではないし、こちらの聞き取り能力の問題もあるので、話の細かい所までは分からないが、連れの女性が、マルク、マルク、と繰り返しているのを聞き取ることができた。男性の口から、「絵」とか「作品」とか「展覧会」といった専門用語（？）が聞こえてきたところを見ると、どうやら彼は画家か美術評論家と思われた。いや、画家か評論家などと済ましている場合ではない。隣から聞こえてくるフランス語と先ほどまで私の前を歩いていた人物の服装を思い出してみると、そんな馬鹿な・・・とは思いつつも、ひよっとしたら・・・と思わないでもなかつたのである。そう思うと、心なしか揮発性の油の臭いが漂つて来るような気がする・・・。

その顔には見覚えがあつた。しかも、そんな遠い昔の話ではなく・・・つまり、つい今し方見てきたばかりの顔ではないかと思ひ始めたのである。手で掻きむしつたようなもじやもじやの白髪、彫りの深い造作、鋭い眼差し、ラフ

東京駅の改築に際して、外壁の赤煉瓦はリニューアルされたようだが、中の通路や展示場の壁面は、昔の赤煉瓦がむき出しになつていて、所々に、文化財なので手を触れなないようにとの注意書きが出されていた。昔来たときにも思つたことだが、この赤煉瓦の内壁を見るだけでも、ここに来る価値があるように思う。

それにしても、手を触れてはいけない赤煉瓦といわれると、そんな軟弱な壁で大丈夫かと思つてしまうが、損傷もさることながら汚れを気にすることだろう・・・などと階段の壁を眺めながら降りていくと、私の前を、もじやもじやの白髪をした、外国人と思われるかなり年配の男性が、女性に腕を取られて降りていくのに追いついた。追い越せないほどの狭い階段ではなかったが、急ぐことでもないのに、そのまま少し間を空けて後についていく形になった。

前に行く人物に気を取られていたからだろうか、気がつくとい階の出口を通り越してしまつたらしく地下の喫茶室の前に来ていた。一時間半近く立ち続けたので、少し休んでいくのもいいだろうと、寄つて行くことにした。案内された席は、入つてすぐの壁際の席で、正面のガラス越しに小春日和の陽光の中を歩き交う車が見えていた。気が

な身なり・・・じろじろと見るわけにもいかないので、正面のガラス戸越しに、車の行き交う明るい表通りに遣つていた視線を手元に移す際に、それとなく二人を視界に入れるようにするしかない。そうした作業を何度か繰り返すうちに、疑問は次第に確信に変わつていった。隣の御仁は、会場にあつた幟に印刷されていた写真の人物と同じ風体身なりではないか、つまりアトリエで写真に撮られた制作中の画家その人ではないかと確信するに至つたのである。

そう思うと、確かめないわけにはいかない。もちろん席まで行つて、「バルドン、ムツシュ・・・」と直接尋ねる訳にはいかないで、次善の策として、会場に戻つて幟を見直そうと思つたのである。どこをどう通つたか覚えていないが、三階の展示場まで来てみると、部屋の片隅の壁に幟は架かっているのだが、そこに在つたはずの写真が見当たらない・・・というより、姿の部分が抜けてしまつて白いシルエツトになつていたのである。他にも幟があり、それと間違えているのかと思つて探したが、幟はこれ一枚しかなかった。部屋の隅に立っていた係の女性に聞いてみても、幟はこれしかないという答えだった。

絶対にそんなことはないのだ。白髪交じりのぼさぼさ頭の男の写真は、私はここに来て初めて見たのである。それ

も、パンフレットや画集ではなく、ポスターのような大きな幟で見たのである。

後日、ステーションギャラリーには何度も行ったことのあるという友人にこのことを話すと、「お前、大丈夫か？」と言った後に受けた質問は、私を混乱させるものだった。

友人に言わせると、地下に喫茶室はないというのである。喫茶室どころか、ステーションギャラリーには地下はないというのだ。でも、私は確かに、階段を駆け上がるようにして一階受付に行き、そこからエレベーターで三階に上がったのだと伝えると、でも、喫茶室から表通りを行き交う車を見ると言うのはおかしいだろう、地下にいた人間がどうして窓越しに表通りを見ることができると言うのである。斜面にある建物なら、表から入ると一階だが、裏は地下で・・・ということも考えられるが、そういう理屈は成り立たないようだった。

友人の言うのが正しいのかもしれない。人物については他人のそら似ということもあるだろうし、喫茶店については他の店と勘違いをしているのではないかというのだが、時間が経てばたつほど、あの日見たことは現実のことだった

と思えてならないのである。

推理小説作家・佐藤春夫

私のような、文学の素人の言うセリフではないが、佐藤春夫という作家は得体の知れない作家である。俳句や短歌もものする詩人であると同時に純文学作家であり、推理・探偵小説も書けば怪奇・幻想小説からフォークロア、さらにはどう分類したら良いのか分からないようなものまで、その作品は、間口が広いというか奥が深いというか、実に多種多様である。

推理・探偵ものとしては、「指紋」「陳述」「女人焚死」などは、文学全集にもミステリーを集めたアンソロジーにも必ずと言っていいほど収録されており、代表作ということになるのだろうが、それぞれが異なった作風に仕上げられていて、僭越な言い方だが、改めてこの作家の力量を知ることが出来る。

「指紋」は、大正七年の作である。指紋が犯罪捜査の決め手に位置づけられたのがいつのことか、正確なことは知らないが、おそらく、この作品の構想・発表からそれほど時代は遡ってはいないのだろう。丸善を通じて、指紋に関する欧米の最新の研究成果を取り寄せて犯人に迫るあたりは、

浮世離れた感じがしないでもないが、それはまた時代を感じさせるということでもある。アヘン、アメリカ映画、金時計などの小道具を配し、「世ノ中ニハ全ク相等シイ形ヲ具エタニツ以上ノ指紋ハ絶対ニナイ事」という知見をキーコンセプトに読者を引っ張って行くというのだが、なぜ殺人事件が起きたのか（動機）は全く語られず、確たる証拠の指紋だけが独り歩きしているように感じられた。

この作品で「散歩」に出かけるとすれば長崎ということになるが、百年以上も前の事件の舞台であり、今となっては関係個所を特定することは不可能と思われた。

「女人焚死」が公にされたのは、昭和二十六年のことである。戦時中、佐久に疎開していた春夫が、おそらく実際に身近（信州入山辺村）で起きた事件に題材を得て、作品化したものであろう。山林で猟奇的な死に方をした女の死体が発見された。当日の女の足取り、他殺か自殺か、それぞれの場合の動機等をめぐる本格的推理小説ということが出来る。現代日本文学大系にも収録されているところから推理小説としてだけでなく、純文学作品としても評価されるべき作品ということになるだろう。学生時代に手にした短編文学全集《筑摩書房》にも、この作品は収録されている、私をはじめ春夫を知ったのは、この短編全集を通して

てであった。

この作品をめぐる「散歩」に関しては、現在の長野県美ヶ原近辺ということなので、地図散策をしてルートの確認をしたのだが、季節がいつの間にか秋から冬に移ってしまい、道路凍結の恐れもあることから、暖かくなってから考えてみたいと思っている。

結論から言うと、「陳述」は、ここに並べた三作品の中では、私の一番気に入った推理小説ということになるが、当初は一番敬遠していた作品であった。なぜなら、表題にあるように、この作品は、犯人の陳述を再現するという構成上の必要から、全編が漢字とカタカナで書かれているからである（アンソロジーによってはカタカナを平仮名に書き換えたものもあるらしい）。

推理小説のジャンルで言うと、この作品は倒叙物の範疇に入るだろう。事件は起き、既に容疑者は逮捕され、裁判における陳述を通して、事件に至るまでの経過が犯人の視点から明らかにされるのである。こうした叙述方法によって明らかにされるのは、なぜ事件が起きたのか、なぜ彼は彼女を殺さなければならなかったのかという動機である。松本清張が人気を博した理由の一つは、動機重視の手法を用いたからであり、私は現実離れた密室殺人やマニヤッ

クな列車トリックよりも、「陰に女」がいたり、自分の過去を知る人物の登場に替えたりする人間に共感を覚えるのである。とりわけ、性格的な問題からか、私は「復讐もの」に共感するところが多く、その意味でも、「陳述」は面白かった。

この作品を読んで、興味深かった点の一つは、夥しい種類の医学・生理学用語が用いられている点である。これだけ具体的・特定の用語が使用できるということは、かなりの自信あつてのことであろう。佐藤家は、代々医家であつたという点だから（確か、春夫の弟は慶應義塾の医学部に通つていて、春夫は一時、その下宿に同居していたのではなかったか）、医学的知識に馴染む環境であつたわけだが、それだけでこの詳細で具体的な記述はできるものではないだろう。春夫は、この作品のために意識的に勉強をされたのだと思う。また、医師であり推理作家であつた木々高太郎氏が文學大系の月報に記事を寄せていることから見て、慶應義塾大学の同窓ということもあつて、指南役を務めたのかもしれない。

「お絹とその兄弟」の足跡を求めて八王子へ、「山妖海異」や「熊野灘の漁夫人魚を捕らえし話」などの怪異の故

館とし公開されていることを知つたのは、いつのことだったろう。この「文学館散歩」を思いついたときには、いざれ訪ねてみたいと思つていたので、短くとも五、六年は経つてゐるのではなからうか。

一度訪れてみたい、そして出来ることなら二階のあの廊下に立つて春夫と同じポーズを取つてみたいと思ひながら、なかなか腰が上がらないどころか、計画さえ立てられないでいたのは、そこがあまりに遠いからであつた。遠いというよりは、物理的にも心理的にも行きにくい所と言つた方が適切だろう。名古屋から特急で三時間半かかるといふことは、わが家から、新横浜・名古屋経由で行くとして、時間的には、名古屋は中間点よりもずっと手前に位置していることになる。それだけではない。記念館訪問を除けば、そこまで（あるいはその近くまで）出かける理由が何も見つかからないのである。熊野古道まで足が伸ばせれば、そのついでにといふことも考えられるが、膝痛を抱えていて長距離歩行は避けたいところなのに加え、幸か不幸かここに来て二日連続して自由になれる日が取れないのである。

しかしながら、遠い行きにくいと言つてゐる場合ではなくなつてきた。この稿を完成させるためには、どうしても熊野詣でをしなければならぬのである。日も長く

郷を訪ねて紀州へ、「女誠扇綺譚」「蝗の大旅行」の台湾へと、散歩のアイデアは尽きないが、それらは成著（たとえば「読本」）に譲つて、最後の散歩に出かけることにしよう。

熊野の洋館

この「文学館散歩」に佐藤春夫を取り上げたいと思つたのは、三十年以上も前に購入した現代日本文學大系の扉写真を見たのがきっかけだつた。それは、吹き抜けになつた二階の廊下に立つ春夫の姿を、階下から見上げるようにして撮つたもので、佐藤春夫の姿よりも、その舞台となつていたアールヌーボー風のアーチ窓や廊下の手すり、壁ランブなど建物の意匠に目が奪われてしまつたのだつた。廊下に立つて煙草をくゆらす春夫の背後には、ガラス張りの屋根を通して、外の木々とその葉の間から漏れてくる陽光が写り込んでゐる。天井・屋根を通して外が見える訳だから、そこはガラス張りになつてゐるということ、サンルームのようにも思われるが、吹き抜けのサンルームというものも不思議な感じがして印象に残つたのだつた。

その印象的な洋館、旧佐藤邸が、東京都文京区から生誕の地である和歌山県新宮に移築・復元され、佐藤春夫記念なつてきた春のある日、名古屋に住む古い友人と落ち合うことを動機づけに、新横浜から新幹線の乗客となつたのである。

名古屋駅を出た新宮行きの列車は、途中の亀山駅で関西本線から紀勢本線へと路線を変えるようだが、乗り換えをするわけではないので、乗客には特段の変化はない。その後、津、松坂を過ぎてしばらくすると、列車は、人家も疎らな山間部に入つていく。漠然と、紀伊半島の東海岸を進むものと思つていたので、所々に崩落の跡も生々しい山麓を行くのは意外であつたが、思えば、この辺は我が国屈指の多雨地域で、そのお陰で樹木の成長著しく、林業が盛んだったと、昔学校で習つたのだつた。そんなことを思い出していると、線路に並行して走つてゐる道路が、いつの間にか雨で濡れていて、偶然のこととは言え、屈指の多雨地域らしいタイミングのいい歓迎であつた。しばらくすると列車は、地理の時間でお馴染みの尾鷲に着いた。

今でこそ、新宮―名古屋間は、特急で三時間半だが（それでも私にとつては、地の果てに行くような思いであつたが）、春夫が東京に向かつたのは百年以上も前のことである。当時はどんな旅だつたのだろうと思つてみるが、なか

なかいメージが湧いて来ない。

帰ってから調べて分かったことだけれど、紀伊半島の東岸を名古屋に向かう線路は、比較的最近になって完成したようだ。さすがに、途中に位置する伊勢まで向かう路線は明治の頃には出来ていたようだが、新宮よりもずっと名古屋寄りの尾鷲まで完成したのでさえ昭和になってからのことだった。春夫の上京は、十八歳のとき（一九一〇年 明治四三年）だから、彼の採ったルートは、この旅で私が使った東海岸回りではなく、和歌山、大阪経由の西海岸回りだったのだろう。関西方面から、那智の滝や南紀白浜の温泉などの観光地を目指すこちらのルートは、早くから開かれていたようだ。

新宮駅がJR東海とJR西日本の境駅になっているということは、行って初めて初めて知ったことである。両方の鉄道会社の端に位置するということは、国鉄時代にあっても、端っこ扱いだったのだろうと思い、最近になっての開発を納得したのである。

新宮駅から歩くことおよそ二十分。例によって、ストリートビューで何度もバーチャル実地踏査を行っているので、全く初めての訪問であるにも拘わらず、見覚えのある街角

に、すっかり馴染みになっている建物が目に入ってくる。そこは、熊野速玉大社境内ということだが、勉強不足で速玉大社がどのような神様なのか全くわからないので、こちらの神様には申し訳ないが、文学の神様の方を先にお参りすることにした。

周囲に配されている木々が妨げになって、建物の外観からはその特徴ある設えはよく見えなかったが、一步玄関に入るや、ここまで訪ねてきたことが無駄ではなかったことが実感出来るのだった。入ってすぐの右手には、見覚えのあるアーチ窓が並んでいる。受付を済ませ、アーチ窓の前に立つと、そこは、階上の廊下でポーズを取っていた春夫を撮った、まさにあの場所だった。二階へは、目の前の階段を上って行くことになるが、階段部分には蹴込みがなく裏面が透けて見える構造になっており、手すりも細い鋼鉄にカーブを加えた透かし細工の作りで、デザイン性に富んではいるものの華奢な印象は拭えず、階段の急勾配とあいまって、ここを利用するのは何とも心許ない感じがする。

後になって分かったことだけれど、家の奥には幅も広く頑丈な曲がり階段があり、こちらが通常の階段で、急階段は日常的な使用と言うよりは、吹き抜け部分のアクセント、

装飾性を優先したものであろうと理解した。

他に来館者はいないので、念願の空間をゆっくり味わい楽しむことができるのだが、一刻も早くあの廊下に立ちたいと、その急階段を上ったのである。写真の春夫の位置に立つてみて、ちよつとした違和感を覚えたのだが、その原因はすぐに分かった。屋根である。春夫の背後に、ガラス屋根を通して見えていた木立が見えないのである。木立がないのではなく、屋根が透き通っていないのである。近くに説明があり、雨漏りの心配があるため、かつてのサンルーム様式を止めて通常の屋根を取り付け、天井をガラス張りにして、外光ではなく蛍光灯で明かりを採っているとのことであった。

階下の応接間（春夫が、ラジオのインタビューを受けていて急逝したのはこの部屋だった！）、二階の和室、八角塔の書斎のどれからも、ここに住んでいた作家とこの家を設計した建築家のこだわりが伝わってきて、賢い人たちが作ったのだろうと思うとともに、こういう家に住んでいたら、ひよつとしたらこういう私でも賢くなれるのではないかと思つた次第である。

階段を上つたり下りたりして、小一時間もいただろうか。その間、一人も来館者はなかったが、いつもこんな調子な

のだろうか・・・。

「現場百篇」については、前回も述べたところだが、ここに来て初めて知ったことがいくつもある。

その一つは、二階の廊下への急階段を昇ったところに、見落としてしまいそうな小さな額がかかっている、そこに「桐朋校歌」とあった。はじめ、この地にも「桐朋」と名のつく学校があるのかと思つたのだが、歌詞を読んで驚いたのである。そこには、「国立の丘にして、学校のよき窓は、老松の枝越しに、富士ありて若人を・・・」とあったからである。国立（くにたち）・富士とくれば、それは東京都国立市にある桐朋中学・高等学校であろう。そこは、我が息子が六年間お世話になった学校である。息子の通っていた小学校に関してはPTAの役員をしたこともあって、校歌もよく知っているが、中学・高校の校歌は全く覚えがなかった。そこですぐスマホに初めの数行を打ち込み、「この歌知っているか？」と息子に送ったのである。すると即座に「うわ、二十年ぶりくらいに見た！」との返事がきた。私が、同人誌への執筆のことで新宮に来ていることは知っているが、なぜ母校の校歌の歌詞が送られてきたのかは見当がつかないようであった。

もう一つは、館内に置かれていた印刷物の中に、「方哉

は日本一のせがれなりー佐藤春夫と心理学者の息子・方哉」と題された企画展のパンフレットを見つけたことである。この企画展は、方哉先生の死後、平成二十五年二月―六月に開催されたようで、表紙には親子で並び立ち、何やら談笑している写真が掲載されている。方哉先生、三十歳の写真だろうか。「ジャガール展を見に行きたいのだが、お前、同行できないか?」「ええ、実験が一段落したら・・・」といった声が聞こえてきそうな二人の姿である。パンフレットには、この企画展が、私も一時所属していた「日本行動分析学会」の三十周年記念事業の一つとして、この地で開催される「熊野集会」に合わせて計画されと記されている。また、裏表紙には、今でも私の手元に残しているある先生の名著「行動理論への招待」の写真と先生の不慮の事故死（平成二二年八月）を伝える新聞記事が掲載されている。事故が起きたのは、京王線の新宿駅。その年、私は勤務場所が変わり、JRを利用した通勤から京王線・新宿駅を利用した通勤に変わったばかりのときだった。

こうして、一枚の写真に触発されて想起した「散歩」はその写真の舞台となった熊野の洋館を訪問することによってよく完結を見たのである。

参考文献

- 厭世家の誕生日 岩波文庫 一九四〇年 改版
都会の憂鬱 新潮文庫 昭和三二年（一九五六年）
現代日本文学大系42 佐藤春夫集 筑摩書房 昭和四四年（一九六九年）
美しき町・西班牙犬の家 岩波文庫 一九九二年
日本幻想文学修正11 佐藤春夫 須永朝彦編 国書刊行会 一九九二年
田園の憂鬱 新潮文庫 平成十二年（二〇〇〇年） 改版
怪奇探偵小説名作選4 佐藤春夫集 夢を築く人々 日下三蔵編 ちくま文庫 二〇〇二年
近代浪漫文庫27 佐藤春夫 新学社 二〇〇四
佐藤春夫怪異小品集 たそがれの間 東雅夫編 平凡社 二〇一五年
佐藤春夫 読本 辻本雄一監修 河野龍也編集 勉誠出版 二〇一五年